

2011. 6. 15

日刊 建設工業新聞

論 諸 所

南 泰裕

建築家、国土館大学准教授

2月に広島を訪れた。2年ぶり、2度目の訪問である。今回は、広島国際大学の建築学科のみなさんにご招待いただき、「コンペのコツ」と題して、同大学にて講演をさせていただいた。それに合わせて、広島の主要な現代建築のいくつかを訪れ、広島という地が醸成させてつづけてきた、モダン・デザインの優れて重層的な流れと展開の妙を想った。

今回のイベントを企画して下さった吉岡佑樹さんが、アーキ

ウオーク広島という市民組織の活動を行っていることから、その一環として訪問した建築において、利用者や設計者の声を直接、聞くことができて有意義だった。

最初に訪れた、村上徹さん設計のなぎさ公園小学校は、開放的な配置の中に、静謐な気配を持った中庭や、小礼拝堂のような澄んだ空気をかかえた講堂などが配された、ユニークな小学校だった。そこでは、モダニズムの建築言語を通して新しい学校建築の次元を切り開こうとする意気込みが感じられ

た。その後、大規模な工場の中にガラスボックスを挿入した、谷口吉生さんによる広島市環境局中工場、広大な吹き抜け空間が特徴的な原広司さん設計の広島市立基町高校、黒川紀章さんの広島現代美術館などを訪問した後、村上徹さんや宮森洋一郎さんのアトリエにお邪魔し、村上さんにもお会いしてお話を伺うことができた。そしてこれらの建築の多くから、モダニックなるものを感じさせられたのである。

織り込んで、今も多くの人々に愛されている。第2次大戦の被爆によってこれ以上にならない困難から出発した広島は、それ故かどうにか、建築におけるモダン・デザインの起点を象徴的に表出している。

うものが、その豊かで心地よい空間とはうらはらに、なにか厳格な自己抑制と品格のもとに創造されているように感じられるのである。

批評的な言語に即して言えば、モダニズムという概念は本来、歴史や継承といったことから離反している。伝統や歴史からの切断が、モダニズムの本来的志向だからである。しかし、そうした語義の転倒を越えて、広島においてモダン・デザインが、戦後半世紀にわたって醸成されつづけて、それが現代建築の優れた成果を生んでいるのである。近代は良くも悪くも、

モダン・デザインを醸成する広島

広島という地が、近代建築を語る上で欠かすことのできないメルクマールとしての作品を生んできたことは、あらためて語るまでもない。戦後間もない1955年に、丹下健三によって生み出された広島平和記念資料館の出現は、日本のモダニズムのその後を決定づける大きな出来事だった。また、ほぼ同時期に生み出された、村野藤吾による世界平和記念聖堂も、てらいのない端正なフォルムの中に荘厳な空間を

ニマルでシンブルなデザインに特徴がある、と形容されることが多い。が、地域の建築家に限らず、広島に建築を生み出すとすれば、どこかしらモダン・デザイン的な気配を帯びてくるのである。村上徹さんの作品はもちろんのこと、原広司さんの広島市立基町高校や、谷口吉生さんの広島市環境局中工場も、モダン・デザイン的な精神の延長において、空間が生み出されているかに見える。そこでは建築とい

過去からの断絶と離反を繰り返しながら展開してきた。だが、広島はその特殊な歴史的经验から、消去された歴史を受け止めつつ、新しさとしての歴史を育む、いわば「モダニックの歴史的醸成」という特異な建築デザインの可能性を切り開いてきたのかも知れない。だとすれば、広島における建築の全体は、建築デザインにたずさわる多くの者たちに、少なからず、刺激を与え続けている存在であるに違いない。